

「普通の人」という言い方があるが、普通の人に会ったことがない。みんなどこかしら変わっている。変人をアピールする人には閉口するが。今回は尊敬すべき本格変人先生の思い出を。

明治文学研究科で大学でも教えていたが、18歳で東京に出た時、縁あって何かと親代わりのようになってもらっていた。

その頃、勝海舟全集(全22巻)の編集や執筆に携わっていた先生に頼まれ、国会図書館に度々通い、新聞に掲載された海舟の談話をマイクロフィルムから探す作業を黙々とやった。アルバイトと思いきや、まさか報酬は僕が関わった2冊の本をもらっただけだった。

中から人が集まり次々と開かれる会議用ネームプレートとを、国連ブルーを使いフリーハンドでレタリングした。これは質もよくずいぶん助けられたので、まあおあいこ。世俗のことを先生に言っても糠に釘とは、次第にわかることとなる。

東京都国立市の団地のお宅は凄みがあつた。本で狭

変人先生

いたたく。本や資料が家すべてを占拠しているのだ。ある時、地震で本が雪崩を起し寢床が埋まった。片付けママならず、いつもの椅子で3カ月間、横にはならなかったらしい。さすがに足が腫れて弱ったこの人聞らしい言に、へ、エーと。



僕が宇和島に居を移しても「変わったことはいないですか」と、取り留めない長話の長距離電話がよく掛かってきて困った(僕は電話嫌い)。話していると突然しん。電話の向こうで寝息がスースー。ん?そういえば先生は、眠たくなれ

ば寝、食べたくなれば食べればいいと達観していた。宇和島に来ると必ずミニバイクを借り走り回る。あの夜、飲酒の疑いで警官に止められ、顔を息を吹き掛けよと言われた。先生は「そんな失礼なこと私はできぬ」と拒否。揚げ句、交番に連れ行かれたが、頑として粘り通し勝利。この種の話はまだまだあるが紙面が足りない。

本に埋もれたまま亡くなって10年経つ。世間とのズレなどスルリと躲し、自らの場所で生きた先生。本や資料をギッシリ詰め込んだ、からだか曲がるほど重い鞆を常に持ち歩く。その姿を思い出す度に、ニヤッと親しみの情が湧く。それにしても、これほどの本格変人はなかなかいない。

(吉田 淳治・画家)